

第 3 章

島をめぐる、 地方をめぐる



ドンガラ県知事とともに、漁村で住民と語り合う
(中スラウェシ州ドンガラ県にて。2000年4月)

インドネシアは「多様性のなかの統一」を国是とする群島国家である。とりわけ、インドネシア東部地域は、大小さまざまな島々が点在しており、それをめぐって歩くとしたら、一生かかっても全部をまわるのは不可能だと思うほどである。

島には、陸地とは違った生活空間が広がる。真水のように、陸地では当たり前思っているものが島ではきわめて貴重なものになる。東南アジアの海洋部には、バジャウ人のように海上で生活することが普通の人々もいるが、近年は「陸地にある」政府の政策で陸に上がるバジャウ人も増えていると聞いた。

陸地に住んでいると、こうした島の生活に思いを馳せることは日常ほとんどない。そして、政策立案者の多くが陸地での生活を暗黙の前提に物事を考えているとすると、島嶼部に関する政策立案には重大なバイアスがかかっていたのかもしれない。もともと、島に住む人々にとって、政府という存在は陸地に住む人々とはかなり違った感覚をもっていることだろう。海は陸地を隔てると一般に言われるが、島の人々にとっては島々を結ぶ大事な交通路なのである。

島嶼部が大きな比重を占めるインドネシア東部地域への関心が深まるにつれ、こうした島の人々の様子を知りたいという気持ちが強まっていった。天候や海の状態など不安もあ

るが、思いきって船に乗って島をめぐるしてみた。そして少ない回数ではあったが、インドネシア東部地域の島嶼部がもつ多様性と豊かな表情を感じることができた。

ここではこうした島をめぐる感じたこと、また島以外にめぐった地方で感じたことを、徒然なるままに書き留めた旅行記の一部である。

1 タカ・ボネラテ諸島をめぐる

一九九六年十二月、南スラウェシ州スラヤール県で開催された「海洋セミナー」に参加する機会を使って、マカッサル市に本拠を置くNGO・LP3Mのメンバーと一緒に国立海洋公園であるタカ・ボネラテ諸島を周った。タカ・ボネラテ諸島は南スラウェシ州南端のスラヤール島のさらに南東に位置している。

どこまでも果てしなく続くエメラルド・グリーンの珊瑚礁の海に点在する小さな島々。粒が極小の上質な白砂海岸がどこにもある。その珊瑚礁の規模とそこに生息する海洋生物の多種多様さは、日本のダイビング・ファンの間で最近名前の知られてきた北スラウェ

図9 タカ・ボネラテ諸島，ワンギワンギ島周辺



シ州・マナド沖のブナケン島海域をはるかにしのぐだろう。しかし、まだほとんど知られていないため、観光客の姿を見かけることはなく、まだ手つかずのままの自然が残されている。

このタカ・ボネラテ諸島をめぐつては、インドネシア東部地域開発との関連で有望な観光資源としての開発の可能性が議論されている。しかしそこには、人口は少ないが漁業で細々と生計を立てている人々がいた。以下は、漁船に揺られながら見聞したタカ・ボネラテ諸島のいくつかの風景である。

人々の世界観

同じ南スラウェシ州にもかかわらず、州都マカッサルからタカ・ボネラテ諸島までのアプローチは相当に長い。マカッサルからスラヤール島の中心地ベンテンまでバスとフェリーで八時間、そこからさらに、乗合ミニバスで一時間半かけてスラヤール島南端のアパタナに着く。ここで漁船をチャーターし、漁師の家で四方山話をしながら潮が満ちるのを待つて出航する。タカ・ボネラテ諸島の中心地であるラジュニ・クチル島まで約三時間半、同諸島内の遠い島までは二日近くかかる。船は島影や星を見ながらの航行で、コンパスはめったに使われない。

ブギス族やマカッサル族の動力機つき帆船として知られるフィニシならば、ラジュニ・



ラジュニ・クチル島の集落の朝

クチル島からマカツサルへも、また東ヌサトゥンガラ州に位置するフローレス島のマウメレへも一泊二日の行程である。ラジュニ・クチル島の人々にとって、同じ南スラウエシ州のマカツサルも隣の東ヌサトゥンガラ州のフローレスも同じぐらい身近な存在なのである。移動には船を使うので、マカツサルもマウメレもそしてスラバヤさえも、彼らの意識の上では同様に直結している。行政上はスラヤール県に所属していても、スラヤール島を経由してどこかへ行くことはほとんどない。

タカ・ボネラテ諸島周辺の海域は、実は意外に交易の盛んな海である。キャベツ、ニンジン、ジャガイモなどの野菜は南スラウエシ州の陸地のバンタエンなどから運ばれるが、



船をつくる(ラジュニ・クチル島)

赤玉ネギはフロレス島から来る。油で揚げて食べるウビ・ロロと呼ばれるイモは、スラヤール島経由でブルクンバからも、フロレス島からも、西ヌサトゥンガラ州のロンボク島からも来るが、ロンボク産がいちばん美味とのことだ（こうした情報はもちろんマカッサルでは得られない）。ラジュニ・クチル島では月に数回しか市が立たないが、ブルクンバやフロレスからの商人たちが島々を周ってくる。タカ・ボネラテ諸島の人々のほとんどは漁師であり、捕った魚を船でマカッサルなどへ運び、マカッサルから日用品や食料品などを積んで戻ってくる。マカッサルの旧港であるパオテレ港には、そうした漁船が多数停泊している。

タカ・ボネラテ諸島には、最近まで無人島だ

ったところに人が住みついたケースも多い。島によってブギス人住民の島、一九四〇年代頃まで海上生活をしていたバジャウ人住民の島があるが、両者混合の島が多い。ほかに東南スラウエシ州から移り住んだブトン人住民も居住している。ブギス・バジャウ混合の島では、ブギス人集落とバジャウ人集落は明確に場所が分かれており、その住形態から後者がより低所得であることが一目でわかる。バジャウ人集落のなかには、九二年十二月のフローレス地震による津波で家が崩壊したところも少なくない。

自然に翻弄される人々

碧色の海と白砂海岸に
代表される美しい自然

をもつタカ・ボネラテ諸島。だが、人々の生活はいまだ自然に翻弄されつづけている。



無人島のジェネト島には1年に3カ月だけ
バジャウ人が住んで漁をする

第一に季節風の影響がある。たとえば、雨季に入る十二月から二月にかけて強烈な西風が吹きつけて海は大しけとなり、船を出帆させることはほとんど不可能になる。この間、人々は島から外へ出られない。ただし、島の人々は海が穏やかになるときを知っており、そのときに集中して出帆する。

第二に珊瑚礁の海である。珊瑚礁の海は遠浅であり、夜の航行では懐中電灯で水面を照らしながら慎重に進まなければならない。船底が珊瑚礁に当たって、進めなくなるからである。珊瑚礁の島では深遠な港湾を造ることが難しいので、満潮時をねらって出帆することになる。船が航行できる時間は限られてくる。

第三に、タカ・ボネラテ諸島で最大の問題が水である。同諸島の多くの島には真水がなく、水源がないので井戸も掘れない。結局、天水を利用せざるを得ないのである。商人も真水売りに来るが、その値段は、雨季には一ガロン当たり一五〇〇ルピア（一リットル当たり約二〇円。一九九六年十二月時点の価格）だが、乾季には雨季の二倍になる。実際、水源のある島の住民のほうが格段に豊かな生活をしている。「都会の人は真水がないのですぐに帰りたいくなるだろう」と地元の人言っていた。案内してくれたマカッサル在住のNGOでは、最初の頃、真水がなくて礼拝の際に体を清められないとして、イスラーム教

徒のメンバーが島の生活に二日と耐えられずに戻って行つたと言う。島の住民もまたイスラム教徒なのだが。

南スラウエシ州の陸地でなんでも手に入るマカツサルで生活していると、自然や気候の変化の影響を感じないことがあたり前になつてしまつてゐる。自然に翻弄されつづけるタカ・ボネラテ諸島の人々に思いを馳せることは難しい。

爆薬や化学物質
を使つた漁
タカ・ボネラテ諸島では爆薬を使つた漁によつて珊瑚礁が破壊される
ケースがあると聞いていた。泊まつた漁民の家でその話を聞こうとし

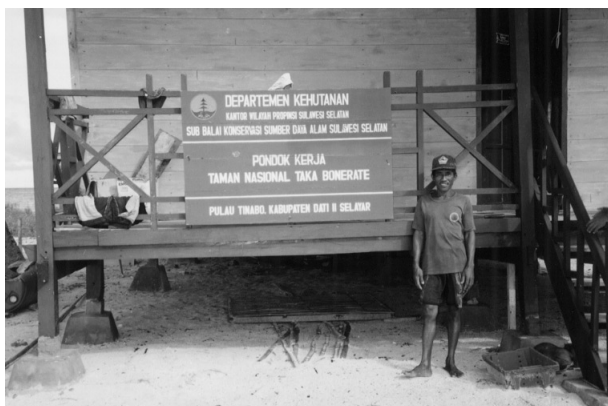
たが、なぜか人々は口をつぐんでしまつた。新聞記事などからは、国立海洋公園に指定されて漁のできなくなつた貧しい漁民が爆薬を使つた漁を強いられるという印象をもつていた。でも爆薬はどこから来るのか。漁民はそれを買えるのか。

一方、化学物質を使つてナポレオン・フィッシュなどの熱帯魚を捕獲することもこの海域で広く行なわれている。化学物質を使つて、珊瑚礁の中に潜んでいるナポレオン・フィッシュの神経を麻痺させ、珊瑚礁の外へおびき出すのである。そのナポレオン・フィッシュは、いくつかの流通段階を経て、台湾や香港へ売られていく。

なぜこうした行為がなくならないのか。どうもカネ目当ての一部の役人らが絡んでゐる

様子だ。今回同行したNGOのメンバーは、環境保護の規則を守らせるには役人や軍人をその対象に含めなければ無意味だと語った。また、地元民にもいないことはないが、よそ者がやってきてそうした漁をするケースも多いということだった。

スラヤール島の近くにあるバハラン島で聞いた話では、爆薬や化学物質を使って漁をしていた者を地元住民が現行犯で捕まえて、使っていた船を燃やしたことがあるそうだが、捕まえてもまた現われる、いたちごっこになるという。地元住民は、伝統的な漁法ならばナポレオン・フィッシュでも他の熱帯魚でも捕獲してかまわないが、環境破壊につながる方法での捕獲は厳しく監視する方針だそうだ。バハラン島の住



国立タカ・ボネラテ海洋公園管理事務所の作業小屋

民は「島の環境を守る会」を結成しており、住民全員がその会員になっている。

役人は誰も
行きたがらない

タカ・ボネラテ諸島の人々によると、州どころか県の役人さえ日常的にはほとんど来ないそうだ。ただし総選挙運動期間だけは別で、州副知事クラスも与党支持を求めてやってくるといふ。もし役人にその理由を聞けば、アプローチが長い、交通費がかかる、天候の影響を受けるので日程が確定できない、などと答えるだろう。役人の来ないタカ・ボネラテ諸島では現在、NGOが入って、島民グループの組織化や相互扶助活動の支援などを行なっている。

以前、マルク州の州都アンボンで州の役人に、アンボン島の隣のセラム島にある実験農場（ジャヤンティ・グループが経営）までどのくらいかかるかを尋ねたら「日帰り可能」と言われた。しかし、実際には三日間を要することが後でわかった。「日帰り可能」と言ったのはセラム島に二年間滞在した役人だった。

地域開発政策を進める上での一つのネックとして、州や県の役人が自分たちのお膝元の実状を把握していないことがあげられる。情報は下から上がってくるが、それが何の点検もなしにそのまま州や中央へ流れていくのである。

タカ・ボネラテ諸島をインドネシア東部地域の観光の目玉にしたい南スラウェシ州政府

やそこにホテルを建てたい実業家はこぞって「タカ・ボネラテ諸島は素晴らしい」と連呼する。しかし同諸島の本当の姿を見た人はほとんどいない。タカ・ボネラテ諸島の観光開発はこうした状況のまま始まってしまっている。

マカッサルに戻って来て、州の役人に次のように言われた。「役人が誰も行きたがらないので、日本の援助で青年海外協力隊員をタカ・ボネラテ諸島に送り込めないか」と。でもいったい、いつになったら役人自身が行くようになるのだろうか。インドネシア東部地域にはまだまだたくさんの「タカ・ボネラテ諸島」があるというのに。

2 六年ぶりにトラジャを訪れて

一九九七年七月、六年ぶりに南スラウェシ州の代表的な観光地トラジャを訪問した。

トラジャ地方は、インドネシア有数のアラビカ・コーヒーの産地として知られている。

また、一週間余も続く大規模な葬式、大きな岩に掘られた墓とその上部に置かれたタウタウ人形、トンコナンと呼ばれる特徴ある舟形家屋などにも有名である。毎年、六～八月の観

光シーズン（この時期に葬式が集中する）には、フランス人など西欧人を中心とする外国人観光客で賑わう。高級ホテルも数軒でき、民宿や簡易旅館が主だった以前とは様変わりしている。

六年ぶりに訪れてまず
目を見張る道路整備

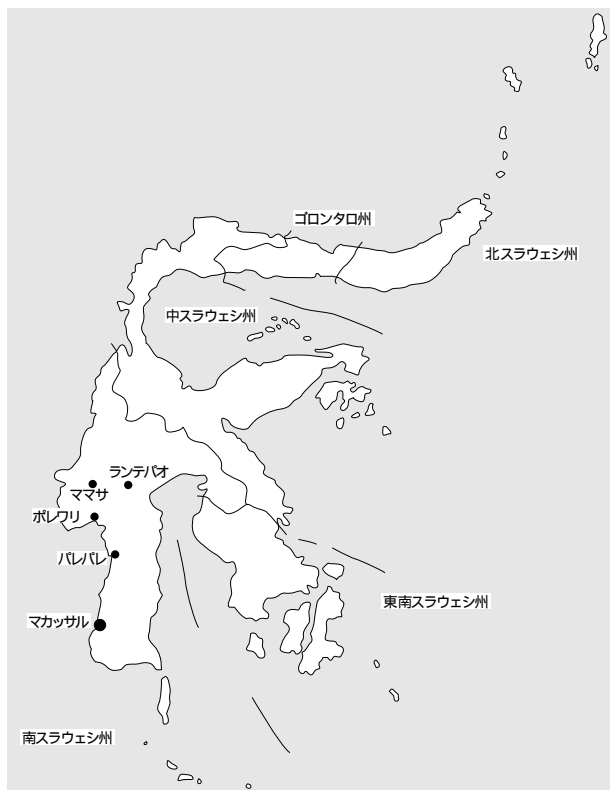
驚いたのが、道路がよく整備されていたことだった。

トラジャへの道のりはかなり遠く、南スラウエシ州の州都マカッサルから約三二〇キロメートル、車で約七、八時間かかる。とくにパレパレからトラジャまでの道は、以前はデコボコの多い簡易舗装だったが、今は立派なアスファルト舗装になり、大型バスが何台も行き交う。トラジャへの道路は山並みを縫って進むのでカーブが多いが、道路沿いの山々の景観が実に見事



準備の整ったトラジャの葬式会場

図10 トラジャ周辺



で、舗装道路での快適なドライブが楽しめる。

道路がよくなったのはトラジャまでだけではない。トラジャの域内の主な道路もきれいに舗装された。かつてジープでなければ無理だった北部の山道もセダンで楽に行けるようになった。その北部のバトウ・トゥモンガという景勝地には、以前は何もなかったが、今ではきれいな展望レストランや民宿ができており、高原の風景を満喫できる。

道路状況の改善は、観光客を喜ばせるだけでなく地域の人々の移動をかなり楽にしている。六年前と比べて、集落と集落を結ぶ乗合ミニバスの数がずいぶん増えた。

トラジャの西隣のママサ地方からのコーヒーや織物などは、かつては馬に積んで山越えしてトラジャに来たのが、今ではママサから車で海岸沿いのポレワリへ南下し、いったんパレパレを経由してそこから今度は北上してトラジャに向かう、というコースをとることが多い。前者なら数日かかるのが後者なら一日で済むからである。現在、ママサとトラジャの両観光地を直結する道路建設が予定されており、地元では早期実現が望まれている。

道路自体の整備だけでなく、沿線の路肩にはコスモスやマリーゴールドの花々がきれいに植えられ、見た目にも道路に潤いを与えている。高地トラジャならではの「コスモス街道」といった風情である。

トラジャ・フェス
ティバルの開催

一九九七年七月一日
から七日までの一週
間、第一回トラジャ・

フェスティバルという催しが開催された。

トラジャ創立七五〇周年を記念したこの行事では、竹楽器の演奏会、民族舞踊、地元料理コンクールなど二〇以上のアトラクションが組まれた。

そもそも、このトラジャ・フェスティバルを開催した理由は、一九九六／九七年度のタナ・トラジャ県の自己財源収入が前年度比で三〇％も減少したことにある。自己財源収入の多くを観光に依存するタナ・トラジャ県にとって、これは観光客数が前年度よりも減少したことを意味する。このフ



葬式の後に行なわれた水牛の解体

エステイバルのために、タナ・トラジャ県政府は約五億ルピア（当時のレートで約二五〇〇万円）を支出した。

会場となったトラジャの中心地ランテパオの芸術センター広場には、各郡のスタンドが九軒建てられ、各郡の名産品の展示直売や機織りの実演などを行なった。

そういえば、一九九六年五月、マカッサル在住の批評家が、トラジャ人の女性全般を誹謗・中傷する発言をしたことがある。この発言に抗議して、トラジャ人ら多数が二日間にわたってマカッサル市内をデモ行進した。タナ・トラジャ県知事は女子高校生の純血さを訴える嘆願に涙を流し、怒りを露わにした。

この発言が遠因となって観光客が減少したと考えたのか、県政府はフェスティバル開催で観光地トラジャをアピールしようとしたのだらう。トラジャ・フェスティバルを毎年開催することも検討されていた。

フェスティバルにやってきた観光客の多くはインドネシア人観光客で、外国人観光客用のパンフレットなどは作らなかつた様子だ。また、予定のアトラクションが開始時間になっても始まる様子がなく、結局中止になるということもあった。今後は、フェスティバルの本格的な宣伝とプロフェッショナルな運営が必要だらう。



舟形家屋のひとつであるトンコナン
(タナ・トラジャ県パラワ)

シセムバを見物して

七月のトラジャは米
の収穫期をむかえて

いる。水田には背の高い在来種と背の低い高
収量品種が植えられている。前者はアニア二
と呼ばれる石製の刃物で稲の上部のみを刈ら
れ、それを丁寧に束ねながら作業が続く。束
ねられた稲穂は、トラジャの伝統家屋トンコ
ナンの北側に建てられる倉庫に保管される。

この米の収穫が終わった後の田圃で、村人
が集まって「シセムバ」が行なわれる。シセ
ムバは、両手をつないだ男たちのグループが
足だけを使って互いに相手方を蹴りまくる行
事である。蹴って相手が倒れたら、それ以上
蹴ってはいけない。審判もなく、勝ち負けも
ない。お互いに蹴りあって、足が痛くなつて

疲れた頃にお開きとなる。

今回は、トラジャ北部のデリ集落でたまたま見る事ができた。稲刈りが終わった田圃に残った泥水を跳ね上げ、男たちが豪快に蹴りあう光景に、老若男女がみんなで歓声を上げていた。

トラジャ中心部ランテパオに戻ってきて、またシセムバを見学した。トラジャ・フェスティバルのアトラクションである。シセムバのプレー場に入り込んだ多数の観客を警官が長い棒を振って追い払っていた。プレーヤーが蹴りはじめてしばらくすると、参加者が興奮しすぎないようにと警官が中に割り入って制止する。デリ集落のとは趣の違うシセムバであつた。



高原の山裾に広がる棚田
(タナ・トラジャ県バトゥトゥモンガ)

観光開発で変わる人々

以上述べてきたように、六年前に訪れたときと比べて、観光地としてのトラジャはそれなりの発展を遂げている。だが、トラジャの人々もこの六年間で変わりつつある。

織物で有名な北部のサダン集落を訪れると、以前はなかった織物売りのスタンドが何軒も並んでいた。そこでは、伝統的なサダン織や西隣のママサ地方の紺に加えて、ジャワのバティックや東ヌサトゥンガラの紺、ありふれたＴシャツまで入り混じって売られていた。以前は、トンコナン家屋の脇でサダン織だけを細々と売っていた。「とにかく売ればよい」という今のような売り方によって、伝統的なサダン織の商品価値がどうなってしまうのか、サダン織の将来が若干心配になる。

以前、トラジャで年々葬式の規模が拡大し、葬式で使う水牛の供給頭数がトラジャだけでは間に合わないため、北隣の中スラウエシ州にも水牛を求めてトラジャ人が来る、という話を聞いたことがある。観光客相手に派手な葬式を見せるようになったこともその要因の一つと考えられる。

トラジャが観光地として発展することで、人々は変わっていくのだろう。しかし、トラジャ人本来の誇りと素朴さを失ってほしくないと願わずにはいられない。

一縷の望みはある。ある集落で子供たちの歌と踊りを見物したが、彼らは以前、道端で観光客からお金をせびる物乞いをしていた。近くの小学校の先生が彼らを更生させようと始めたのだ。見物客から寄付を受け、それで子供の教科書を購入するそうである。

そうした子供たちが担う未来の観光地トラジャをいずれまた訪ねることにしよう。

3 古着で潤う島 東南スラウェシ州ワンギワンギ島

一九九九年五月初め、東南スラウェシ州ブトン島において、アンボンからのブトン人の避難民の状況を視察した様子はすでに第2章で述べた。その際、経済危機の影響を受けた東南スラウェシ州のなかで例外的に危機の影響をほとんど受けていない場所が二つあると聞いた。それは、カカオ輸出で潤うコラカ県（州西部のボネ湾沿い）と、ブトン島の東側に浮かぶワンギワンギ島である。いったい、ワンギワンギ島には何があるのか。それを知りたくてブトン島から船で渡ってみた。



ラサリム村のバジャウ人海上集落
(東南スラウェシ州プトン島)

古着売買が
経済活動の中心

ワンギワンギ島へはプトン島の
中心地バウバウから乗合タクシ
ーで同島東部のラサリム村まで

約二時間揺られ、同村の乗合ターミナルから埠頭ま
でオジェック（バイクの後ろに乗るタクシーの一種）
に乗り、埠頭から船に乗って約二時間で到着する。

ワンギワンギ島は、プトン島の南東に連なる鍛冶
屋列島（ワカトビ列島）の最もプトン島寄りに位置
し、面積わずか四四八平方キロメートル、人口約四
万人の小さな島である。労働人口の約五十一％は農業
だが、所得構成では労働人口比で一六・三％の商業・
サービス業の比率が最大となる。ワンギワンギ島の
主な住民はプトン人とバジャウ人である。このプ
トン人は、同じプトン人でも「ワンチ人」と呼ばれ
てプトン島のプトン人と区別され、航海術に秀でて

いると昔から評されている。

この小さな島の中心地ワンチ地区南部の一角に巨大な中古品マーケットがあった（当地では中古品を通常R B = エルバーと称す）。その中心は古着である。外見は普通のマーケットだが、中に入ると、ありとあらゆる種類の古着を並べてかけた小屋がどこまでもどこまでも続いていた。ここで古着を商うのは一〇〇人以上の女性商人であり、彼女らは客が来るのをひたすら待つ。なかには、古着のゴムを入れ替えたり、綻びを繕ったりしている女性たちもいた。

これらの古着は、ワンギワンギ島在住のブトン人商人がシンガポールやマレーシア領のタワウ（ボルネオ島の東部）から一度に大量に買いつけてきたものである。ブトン人商人は、買いつけてきた古着を自宅に保管しており、古着マーケットの女性商人は彼らから古着を購入している。ある女性商人によると、支払いは出来高払いで、売れ残りは返品可能だという。

古着を買いに来る人々

古着マーケットには、東南スラウェシ州の州都クンダリ、南スラウェシ州の州都マカッサル、マルク州の州都アンボン、イリアン・ジャヤ州など各地から商人が古着を買いにやってくる。ワンギワンギ島は、インド



古着市場（ワンギワンギ島）

ネシア東部地域で流通する外国製古着の一大卸売センターの様相を呈している。もちろん、島内の住民も、衣類はこの古着マーケットですべて調達している。

東南スラウェシ州政府やブトン県政府の役人が視察でワンギワンギ島を訪れた際には、この古着マーケットで必ず買い物をしていくという。また密輸品を取り締まるはずの警察官もまた古着を買っていく。

古着マーケットにやってくる買いつけ商人は、売られている古着を全部まとめて買っていくほど大量買いしていく。古着マーケットの女性商人は、一カ月に一回しか買いつけ商人が現われなくても、ただ客が来るのを待っているだけで十分に商売をやっているのがある。これら女性商人の多くは以前普通の主婦であったが、収入増加の機会ととらえ、古着のストックを持つブトン人商人にかけあって商売を始めたという。

これらの古着は、ラベルやデザインから見るかぎり

韓国、日本、台湾などから流れてきた夏物である。これら諸国の古着がスラウエシをはじめとするインドネシア東部地域で大量に流通し、経済危機に喘ぐ同地域の人々に廉価で提供されていたのである。

この古着マーケットでは、古着以外に中古オートバイ、中古家電製品なども売買されている。これらもまた、外国からブトン人商人によって運びこまれたものである。

一方、ワンギワンギ島の豊かなバジャウ人集落

バジャウ人の集落は、他の地域、たとえばブトン島のそれに比べるとはるかに裕福に見えた。ワンギワンギ島への渡航地であるラサリム村で見たバジャウ人の集落ではまだ水上生活をしている者がおり、家のつくりもずつ



通路などがきれいに整備された
バジャウ人集落(ワンギワンギ島)

と質素であつた。

訪れたワンチ地区南部・南モラ村にあるバジャウ人の集落内の通路は、狭い木で渡してあるのではなく、セメントで固められた立派な通路である。村長によると、カンブン改善プロジェクトが入ったということである。集落内にはスピードボートを何台ももつバジャウ人の商人がおり、またイスラーム教徒でメッカへ巡礼したことを示す「ハジ」の称号をもつバジャウ人もいる。集落内を歩くと、パラボラ・アンテナを立てた立派な家が何軒もある。彼らのなかには前述の古着を買いつけている者もいる。

バジャウ人の商人は、同じバジャウ人の漁民に捕獲させたクラブやスヌなどの鮮魚を自宅近くの生簀に放し、状況を見て沖合にやって来る船（香港や台湾から来て洋上で取引する）などに売るほか、ナマコ、フカヒレ、海ガメ、ロブスターなどをブトン島のバウバウやバリ島から来る商人に売っている。

古着好況の陰で

このように、ワンギワンギ島の経済活動が、たとえ古着などの密輸品を媒体としているとしても、その影響は地域経済の好循環を生み出している。郡政府は「ワンギワンギ島には失業者がいない」と断言していた。小さな島にもかかわらず有力銀行の支店が三店舗あることは、この島で一定の資金が回っていることを

示す。

しかしその一方、ワンギワンギ島北部のバジャウ人の多い漁村は、古着売買や海産物交易で潤う中心部ワンチ地区に比べるとはるかに貧しい佇まいである。古着好況の陰で、島内の貧富の格差はむしろ拡大している。また、島の中央部は森林伐採の影響で広範囲にわたって雑草が生い茂っていた。住民が薪をとるために森林を伐採したためであるが、森林の再生には相当の時間がかかりそうである。あまり目立たないが、離島でも森林伐採の問題は予想以上のスピードで進んでいるのを目の当たりにした。

広まる古着売買

古着で潤う島、ワンギワンギ島を後にしてマカッサルへ戻って数カ月、マカッサル市内のあちこちに古着を扱う店が急に増え出したことに気がついた。

たとえば、市中心部バワカラエン通りの中古車ディーラー横の古着屋は、今では店舗面積が三倍となり、道の向こう側にまで拡張した。自宅近くの路上にも古着を並べた小屋が現われた。ロコミで知って商人にかけあい、古着を分けてもらって商売をする人が増えている様子である。古着売買の範囲はここマカッサルにとどまらず、スラウエシ各地、いやインドネシア東部地域全般へと広がりを見せている。

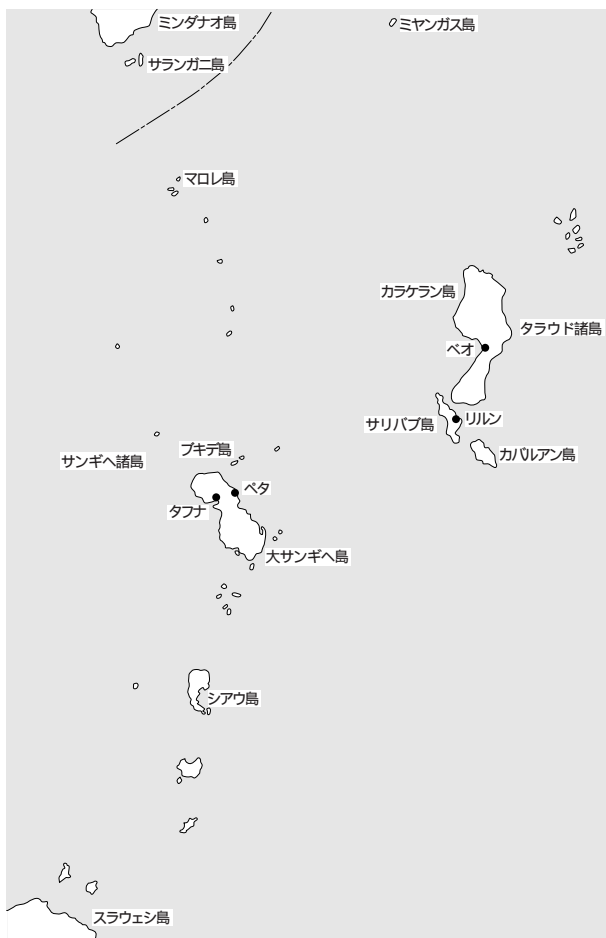
経済危機以前から、フィリピン南部やカリマンタン東部から南スラウエシ州のパレパレを通り、東南スラウエシ州のワンギワン島を経て、マルク州アンボンに至る古着などの密輸ルートがあるといわれていた。南スラウエシ沖の島々では、マカツサル海峡を渡って、古着を直接東マレーシアから買いつけることが日常茶飯である。こうした古着交易のなかに、国境のなかった昔からのブギス人やマカツサル人やブトン人の経済活動のダイナミズムを見る思いがする。

国際的な古着の「リサイクル」が新たな事業機会を提供し、それがミクロレベルでの地域経済に活力を与えていたのである。

4 辺境に「楽園」があった…… サンギヘ・タラウド諸島にて(1)

一九九九年八月、北スラウエシ州開発企画局の誘いを受け、スラウエシ島とフィリピン領ミンダナオ島の間に浮かぶサンギヘ・タラウド諸島を約十日間周ってきた。同諸島は大小一二四の島々からなり、行政上は北スラウエシ州サンギヘ・タラウド（簡略化してサタ

図11 サンギヘ・タラウド諸島



ルとも称す）県を形成する。

サンギヘ・タラウドと併称されているが、サンギヘ諸島とタラウド諸島では趣がかなり異なるし、各々の文化的な独立性も高い。北スラウエシ州の州都マナドで学ぶタラウド出身の学生らが「タラウド分離独立」を叫んだことがあったし、近い将来、サンギヘ県とタラウド県へ分割される予定がある。

限られる交通アクセス サンギヘ・タラウド諸島への交通アクセスは限られる。州都マナドからサンギヘ諸島へは週三便の定期船（夜行）と不定期の高

速艇（一九九九年七月より運行）があり比較的頻繁だ。また、マナドからタラウド諸島へは週二回の定期船（うち直行一便、サンギヘ経由が一便）である。マナドから大サンギヘ島にある県都タフナまで夜行の定期船で約九時間（高速艇で約四時間）、マナドからタラウド諸島のサリバブ島リルン（タラウドの経済の中心地）まで直行で約一四時間かかる。

他方、リルンと県都タフナの間は船が週一便しかない。同じ県内のサンギヘとタラウドは、むしろ別々に州都マナドと直結している印象を受けた。かつてマナドからサンギヘを経てタラウドへ至る定期航空路があったが、採算がとれず廃止となった。このほか、より辺境の島々を不定期連絡貨客船が二週間に一回のペースで周遊する。

当然、サンギヘ・タラウド諸島への消費物資はこの限られた交通アクセスを通じて多くは州都マナドから運ばれる。船の中はさまざまな運搬物資で溢れ、足の踏み場もないほどである。

サンギヘ・タラウド諸島の海域は六〇九月頃を除いてかなり荒れるが、船が欠航になることはほとんどない。

交通アクセスの困難により、州都マナドの人々がもつサンギヘ・タラウド諸島の「辺境性」のイメージは増幅される。だからこそ北スラウエシ州開発企画局の友人たちも「遅れた」サンギヘ・タラウド諸島の開発を重要視したのだろう。しかし今回の見聞で得た印象はやや異なっていた。



ナツメグを買いつけるブギス人商人
(サンギヘ・タラウド県サリバブ島リルン)

「樂園」と呼ばれたタラウド

サンギヘ・タラウド諸島の北東部に位置するタラウドは、以前は「ポロディサ」と呼ばれていた。ポロディサはパラダイス、すなわち「樂園」に通じる。大航海時代にこの地で西欧人が温かく迎え入れられたことから、スペイン人やポルトガル人が平和な天国のような場所と思い、ポロディサと名づけたという説がある。また、女神の子孫といわれる人物の名前がポロディサだったことに由来するという説、オランダ統治時代に「斬つて（ポロ）やつつける（ディソ）」という意味の現地語に由来するという説、などある。女神の子孫とされるポロディサの息子は、寄港したマゼラン船隊から航海術を学んだという。

一八五九年にオランダ人ミッシヨンがサリバブ島に到着し、オランダによる統治が開始されたが、その後この海域の領有権をめぐってアメリカとオランダが争った。一九二六年にパルマス協定（パルマスとはタラウド諸島で最もフィリピンに近い位置にあるミヤンガス島の旧名）が締結され、正式にオランダ領に入った。言語上タラウド語はオーストロネシア語圏に属し、フィリピン領ミンダナオの言語とは区別される。

タラウド諸島はカラケラン島、サリバブ島、カバルアン島の三つの大島とその周辺に広がる小さな島々からなる。諸島内には小さな地域センターがいくつもあり、なかでも県知



ほら貝で客を呼ぶ浜の魚売り(サンギヘ・タラウド諸島カラケラン島メロンガエネ)

事補佐オフィスのあるカラケラン島のベオは行政の中心であり、サリバブ島のリルンは経済の中心である。このため新設される予定のタラウド県の県庁所在地をどこにするかが最大の関心事となっている。

フィリピン漁船の侵入

タラウド諸島では、地

元漁民による伝統的な零細漁業と近代的なフィリピン漁船の領海内への侵入が大きな問題としてとらえられていた。地元政府関係者は、口をそろえて地元漁業の近代化の必要性を説いた。しかし、これについては、域内経済から見た水産物への需要を

考慮する必要があるだろう。

サンギヘ・タラウド県の人口はせいぜい三〇万人程度であり、都市化や人口集中が進んでいないことから、近代的な大型魚市場を建設するのは非効率だろう。漁民は捕獲した魚を浜に並べ、ほら貝を吹いて顧客を集め、一尾二〇〇ルピアぐらいで売って十分に採算がとれている。魚は地元住民の重要な蛋白源であり、立派な冷蔵施設がなくとも、毎日浜で新鮮な魚を買えばいい。

また、フィリピン漁船の侵入によって域内経済での水産物の供給が減少したという印象は受けなかった。実際、フィリピン漁船といっても、乗組員はフィリピン在住のサンギル人（サンギヘ諸島の住民）であることも多く、またフィリピン漁船がインドネシア企業と提携しているケースもあり、なかなか取り締まれないのが現実である。

住民は怠惰か？

地元政府の関係者から常に指摘されたのは人材の問題である。ある郡長は「いくら政府のプログラムを導入しても住民は乗ってこない。彼らは怠惰だからだ」と指摘した。政府のプログラムで農民に種子を配っても農民はそれを蒔かずに放ったらかしにしている、住民は政府のプログラムに非協力的である、という指摘である。そして昼からチャプ・ティクス（ネズミ印の意）と呼ばれるヤシ蒸留酒を飲ん

でばかりいる、と続く。

しかし周辺をよく観察すると、農家はさまざまな作物を植えている。単作はほとんどなく、ココナツヤシ、ナツメグ、丁字、カカオなど多種類の換金作物を植えている。事実タラウドは昔、サンギへと並んでコブラの一大産地として栄えていた（ただし、現在は病虫害が放置され、対策が遅れたため多くのココナツヤシが再生産できなくなっている）。

タラウド諸島では、とくに調味料として使う小型のミカン（魚料理用の調味料として使われることが多いので現地ではレモン・イカンと呼ばれる。「イカン」はインドネシア語で「魚」の意味）があちこちに植えられていた。このレモン・イカンはタラウド諸島の特産で、それに目をつけた実業家がマナドで栽培してジャカルタやスラバヤに出荷し、大成功しているとのことである。

このように、農民が自分なりに工夫して農作物栽培を行なっているところに、政府のプロジェクトで見慣れない種子が配布されれば、農民は戸惑うはずだ。イモ類が主食のタラウド諸島でも、カラケラン島で灌漑プロジェクトによる水田開発が行なわれた。貧困救済のためのソーシャル・セーフティ・ネット資金も他地域と同様に入ってきていた。

マナドから船でサリバブ島リルンに着き、リルンから船とバスでカラケラン島の中心地

ベオまで行つたが、沿道の家々の庭先に水道の蛇口が設置され、住民が自由に水を利用している姿が印象的だった。南スラウエシ州の離島を歩いた経験からすると、離島では「水をいかに確保するか」が最重要課題だからである。カラケラン島の山々には水源が多く、住民は水汲みの労力から解放されている。この水の豊富さという点では、大サンギヘ島も同様であつた。

タラウドの労賃は単純労働でも一日二万ルピア（食事代を除く）と他地域よりも高い。労働力不足の傾向はあるが、港に船が入れば荷役をし、それ以外は商店の荷役や農園労働に従事する、と一人の労働者が融通を利かせて働く。訪問した時点では、ナツメグや丁字の輸出価格が高く、辺境であるタラウドの地域経済はその恩恵を享受していたのである。さまざまな換金作物、豊かな水、高い労賃のタラウドは、地理的にスラウエシの北はズレの辺境にありながらも、まさに「楽園」ともいえる趣があつた。

5 国境を行き交うサンギル人 サンギヘ・タラウド諸島にて(2)

タラウド諸島からサンギヘ諸島へ渡ると、にわかにフィリピンとのつながりを身近に感じるようになる。逆に、地理的によりフィリピンに近いと思っていたタラウド諸島では、フィリピンの匂いをあまり感じなかった。たしかに地図をよく見ると、サンギヘ諸島はフィリピンのミンダナオ島から延びる列島沿いに位置しているが、タラウド諸島は外れている。余談だが、大サンギヘ島を今回訪れて、第二次大戦中に日本海軍がこの島を攻撃し、多くのサンギル人の首がはねられたことを初めて知った。日本軍人は「首はね屋」と呼ばれたそうだが、一方で、尊敬を集めていた軍人もいたということである。大サンギヘ島の山間部の中腹に日本軍がサンギル人を使って作らせたといわれる道路があり、今はアスファルト舗装されて使われている。サンギル教会特有の踊りをワイエルと呼ぶが、そのなかに飛行機の動きを真似たものがあり、日本軍の軍用機を模しているという話だった。

密輸品の町ペタ

大サンギヘ島の中心地タフナはサンギヘ・タラウド県の県庁所在地である。ここから舗装道路で一山越えると一時間で東海岸の小さな港町

第3章 島をめぐる，地方をめぐる



密輸品を扱う商店で見たフィリピン製ビールの空瓶(大サングヘ島ペタ)

ペタに着く。ペタの商店街ではフィリピン船から購入したというさまざまな密輸品が売られている。表向きはごく普通の店構えだが、案内されて鍵つきの奥の部屋に入ると、香水や化粧品が所狭しと並べてある。部屋の外には、フィリピン製ビールの空瓶の山があった。

ペタに密輸品を買いに来る客は少なくない。しかし密輸品と思ってよく見ると、実はインドネシア製品もけっこうある。フィリピン製といわれてペタで買った香水が、マカッサルでは半値以下で売られているのを見たときにはさすがにがっかりした。「密輸商」は商売上手である。

このペタの沖合にブキデ島がある。ブキデ島は県都タフナとは山を隔てた反対側にあり、かつペタから見える側に集落はなく、密輸船が人知れず寄港するのに絶好の島に見える。大サングヘ島からフィリピンへ向かう人々はこのブキデ島で通行証明書を発行してもらい、船でフィリピンとの国

境にあるマロレ島へ行き、その出入国管理事務所を経てフィリピン側へ渡るのである。

サンギル人往来略史

サンギへ諸島の主住民はサンギル人である。植民地時代、オランダ人は「ヘ」の発音ができなかったので「サンギへ」を「サンギル」と発音した、と言われている。独立後、地名はサンギへとなったが、なぜか住民は依然としてサンギル人と呼ばれている。

このサンギル人は、以前からフィリピン南部、とりわけミンダナオ島およびその周辺とサンギへ諸島との間を行き来してきた。とくに二十世紀初めに、多くのサンギル人がフィリピンへ渡り、農園労働者や港湾労働者として働いていた。



人やモノの流れの中継地であるブキデ島を望む
(大サンギへ島北タブカン郡)

一九五〇年代、サンギル人商人は、サンギヘ産コプラをより高価格のフィリピンへ持って行って売り、フィリピン産の日用雑貨品をより高価格のサンギヘ諸島へ運んで利益を上げた。これに触発されたサンギル人がフィリピンへ移住し、土地を開墾してコプラ生産に従事した。また、六五年の九・三〇事件に連座した共産党関係者のサンギル人が、フィリピン共産党を頼って移住していった例もある。

一方、フィリピンとインドネシアという二つの新興独立国の誕生によってこの海域に国境線が引かれた後、フィリピンに残ったサンギル人は不法移住者と見なされ、インドネシア側へ送還されたり、残った者もフィリピンで二級国民扱いを受けたりした。

一九七〇～八〇年代になるとフィリピン南部でのイスラム系ゲリラ活動の影響で治安が悪化し、多くのサンギル人がインドネシアへ戻った。経済的に成功したサンギル人の中には、サンギヘ諸島へだけでなく、新たな農地開拓をめざして北マルクのハルマヘラ島へ移住して行った者もいた。

働き者で知られるサンギル人は、フィリピンだけでなくインドネシア各地にも出て行っている。実際、北スラウェシ州の州都マナドでは、使用人の多くがサンギル人である。しかし、マナドではその使用人を探するのが難しくなつたと聞いた。価格が高騰したナツメグ

や丁字の採取労働者として彼らが故郷に戻ってしまったからである。

フィリピンから帰国
したサンギル人

大サンギヘ島の北タブカン郡で話を聞いたワシンさんは、一九五二年にフィリピン南部バトゥガンディン島で生まれたサンギル人である。同じくサンギル人が多数住んでいるフィリピン・サラン

ガニ島出身の妻（サンギル人）と結婚し、フィリピンで農業および漁業を営んでいた。日常は主にピサヤ語やタガログ語を用い、家ではサンギル語も使って生活していた。

一九七六年、子どもの将来を考え、母国インドネシアの小学校に入学させるため、家族で数隻の船に分乗して帰国した。途中、天候の悪化で、サンギヘにたどり着くことなく家族の何人かが命を落としたという。インドネシア語は帰国してから少しずつ覚えたので、まだ流暢ではない。

フィリピンには現在も兄弟が住んでおり、折に触れて資金援助を頼んでいる。ワシンさんは帰国後も度々生地バトゥガンディン島に足を運んでいる。まだ同島に自分のココナツヤシを所有しており、家族訪問以外にココナツヤシの収穫という目的もある。コプラの値段はインドネシアのほうが高いが、フィリピンからのコプラ持ち込みは禁止されている。

サンギヘからフィリピンへ渡航するには一回当たり片道約一〇万ルピア（約一五〇〇円）



フィリピンから帰国したワシンさん一家
(大サングヘ島北タブカン郡)

に静かに国境を行き来しているのである。

平和共存の島

一般に、サングル教会の活動が活発なためか、サングル人はキリスト教徒と見なされる傾向が強い。しかし実際には、先祖が北マルクのテルナ

かかる。国境のマロレ島で出入国管理事務所とマロレ郡長事務所に二五〇〇ルピアずつ手数料を支払い、ルピアをペソに両替してフィリピン側に渡る。

ワシンさん以外に、フィリピン滞在経験のある何人かのサングル人に話を聞いた。いずれの話でも、フィリピンへ行くのは家族訪問が主目的で、手続きもとくに煩雑ではない。東カリマンタンのマレーシア国境のように、出稼ぎを目的に渡る労働者の大群やそれを仲介する仲介人(チャロ)に出会うこともなかった。サングル人は日常的

テ島やティドレ島から来たイスラーム教徒も数多く住んでいる。県都タフナにはティドレ集落と呼ばれる地域があり、タフナ周辺で活動する漁師や海産物商人の多くはそのイスラーム教徒である。

フィリピンとの間を往来するサンギル人もキリスト教徒、イスラーム教徒まちまちである。また、話を聞いた集落でも、異教徒どうしが隣近所混在して暮らしている。ちなみに、フィリピンでもサンギル人とフィリピン人が異宗教入り混じって平和に暮らしていたが、外部者であるイスラーム系ゲリラの侵入を受けた、という。

海を隔てたすぐ東隣の北マルクでは、住民どうしの抗争が続いていた。犠牲者のなかには移住したサンギル人も含まれていることだろう。マルクで聖戦を叫ぶイスラーム系急進派は「フィリピンからサンギへ諸島を経由して北マルクへ武器が密輸された」という見方を示している。その真偽は定かではないが、「サンギル人は皆キリスト教徒」と見なすような無知な一般化がそうした類の見方を生むのではないかと思える。

過去数年にわたって住民抗争の続くマルク州も、かつては異教徒どうしが平和に共存していた。今はとても平和に見えるサンギへ・タラウド諸島だが、「タラウド独立」を掲げる勢力の存在や、サンギへ県とタラウド県への将来の分離をにらんだ地方政治レベルでの

勢力争いの兆しがかえる。実際、行政面でも、タラウド諸島に所属する郡の郡長の多くはサンギヘ諸島とマナドとの間に浮かぶシアウ島出身者など非タラウド人で占められ、サンギヘ諸島でも同様の傾向がある。また、サンギル・タラウド教会の幹部組織において、サンギル人の優位に対するタラウド人の不満は根強い。

サンギヘ・タラウド諸島が第二のマルクとならないことを祈るばかりである。



ロティ・マロスのひみつ

ロティとはインドネシア語でパンのこと。ジャム（これはカヤ「kaya」と呼ばれ、果物を使わず、卵、白砂糖、ココナッツミルクを時間をかけて練って作る）の入ったなんの変哲もない山型モコモコのパンがここ数年来、飛ぶように売れている。

このパンを最初に売り出したのは、マカッサルから北へ車で三十分のマロスという

町のパン屋である。そのため、このパンはロティ・マロス(Roti: Maos)または短縮形のロマ(Roma。ちなみにミルク・ビスケットの名前にも同じのがある)と呼ばれるようになったが、今ではこのパンを看板に掲げた店が、マカッサル市内から空港やマロス市内へ向かう道路沿いにたくさん出現した。夜に街道沿いを走ると、パロポやマムジューに向かう長距離バスが列をなしてロティ・マロス屋の前に停まっついていて壮観だ。マロス周辺だけではない。南のゴワやタカラルへ向かう街道沿いにも、遠く離れた南スラウエシ州北東部のルウ島のパロポにも、東南スラウエシ州のコラカにもロティ・マロスは進出している。

ロティ・マロスの起源については諸説あるが、日本軍がこの地を占領していた一九四〇年代に始まるといわれる。その当時はロティ・カヤと呼ばれていた。私の知り合いによると、カヤ作りでは中国南部の海南島出身の華人が名高く、ロティ・マロスの出自と関係があるかもしれない。またなぜか、パン屋には南スラウエシ州南部のスラヤール島出身者が多く、車を引いてマカッサル市内を売り歩いていた。

現在のロティ・マロスは、親の遺産を引き継いだ息子夫婦により一九九四年頃から始められたものである。ねらいはバスやトラックの運転手に常連になってもらうこと。

当初は一〇人の運転手だったが、今や常連は三〇〇人以上になった。客を紹介したり連れて来た運転手には、ロティ・マロスに飲み物もつけてタダで渡すという。

息子夫婦の成功を見て、その兄弟や家族が真似して作りはじめ、どんどん広がっていったロティ・マロス。家族や知人のネットワークを利用してフランチャイズ化し、バスの運転手を常連にすることで、バスの乗客をもお得意さんにしていった。こうして、スラウエシの田舎へ帰る人々のお土産として、ロティ・マロスは絶大な人気を誇るにいたったのである。